



A vertical ruler scale from 0 to 10 inches. The numbers are black, except for '80' which is red. The red '80' is positioned at the 1-inch mark. The red '100' is positioned at the 10-inch mark.

顯林愚抄

愚林

二

荀子

卷之三

印社

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之二

卷之二

卷之三

卷之三

卷之二

卷之二

卷之三



室部云

系部云

附方之卷

系部云

系部云

多卦中

魚穀初用

魚穀風

魚穀辛之風

魚穀辛之擗

魚穀
魚穀辛之擗

魚穀初用

魚穀風

魚穀辛之擗

魚穀辛之風

魚穀辛之擗

年為多

山因子而

泉毛避暑
 杜納涼
 久毛納涼
 樹陰納涼
 久毛次第
 菩提林迎
 江友松
 宋毛納涼
 夕納涼
 朝毛納涼
 喧涼納涼
 深衣納涼
 松風納涼
 二月餘
 泉入琴
 納涼
 邪經納涼
 松下迎涼
 月桂納涼
 山源納涼
 故隔一
 爰發
 紳和松

題林愚抄序五
 莫那上
 莫那
 愚向賢達之首多々といひ題す新樹文表すとくもんも
 そ詠わうまへるや 各毛ナ御ハ故
 新古
 オリモアリきふにせのゆり人をふれ花そりかそて 俊がで女
 後改撰
 おうらきあはむ月めくとわ秋のまじめよ拂ひしん おみの推
 玉
 花そめに拂えくと立くとさくにあふふさくうも 中尊寺觀
 猿
 もものわぬりきよまうれそりひくまふれぬ 入たお太鼓
 同
 あくまの手とがねてくほきと移却くわるもば 寶鏡院
 新稿
 きくもやち人のゆめよがくひそくかようせとくとく
 猿
 あくまの手とむかふのゆくをまかのまれあ新院
 本稿
 きのくすく見ゆゆくいふくれ西うきうすくあや 法觀主
 同
 あくまの手とむかふのゆくをうすくあや 法觀主
 あくまの手とむかふのゆくをうすくあや 法觀主
 きのくすく見ゆゆくいふくれ西うきうすくあや 法觀主
 まのくすく見ゆゆくいふくれ西うきうすくあや 法觀主
 まのくすく見ゆゆくいふくれ西うきうすくあや 法觀主
 今を候らぐ乃どうれびとおうへ春のうちとぞう あや

あくを衣のえをそぞろとん神乃別あらまきれり 振るふ
男ふ志兵もひそりもくゆと高め夜よさうえきり たる
きのふをかどみ わとねまわらう日が暮れなばかくらう お定
ぢりあらわとさかくはなれいとくとくせぬまくらん きに

四百四

勢ひありてりもアラシアリ其のあらひの事と爲そする 日
千葉にほんとまくよふのうけりより被ふるましめれども えも奈良
月 ひかよをれすか 乃まふなあやく御ましめれども あはれ下
首えね 鳴鶴
ひづきわらうと死波のうゑけとまく まちからり あま
首えぬ 狂子
ちもしら死ぬようれ者乃れ死ぬてせれ限よまうえ 云旅
還まむ如臂 朝古 おれふそくくふみわくんがまうれ死ハクアセト
文政 予 まみくわの殺すりまくまくまくまくまくまくまく

日
けむるやうのとおは、社は年よりそぞきる。基保
朝古
安らぐやうのときあるべからず。而してそれなれば、急工
後古
ひりまとうれ。被ひ衣そのふくまく打ひあたるもよ。亡此一處
玉
はかりとひは、先乃紳うかとひすうる。ハあらひの是を。後承
日
馬文乃兵のうとを立つて、海うるの義のまろとを替ふ。太兵

月 かにとくひいそれもすむす御とすすめに林ハ行實つ次傳
影子 別うへえのがらぬふうを思ひてもやな爲ひとくん あ丈 織部
日 まくはるゆきも、さやまなねづれれもそらねくとハ 花室を院
日 さよるから衣の衣ひもかきのうみゆきをおもてれ袖木 ひ糸門左官
日 うきさげの衣乃もさりれあめ大きまきへてあ、まかうり ほ二佐字子
日 春ままでおもつかが衣身にすもれお夏をまけり 乃の室
日 まうもまくとをもがくとてああく乃衣ひもみえ、たきり き子内歌主
日 新後指 うとくとくりやわきく方を衣うちてくうれかくとくらん 重音記説主
最 うきくらわきくてうれもろを今おきまきまよ あゑ
日 宮齋屏風 う終ひとと被よけひをすすりへてあらはる衣弟 朝陰
日 遠文モ な裏へうとまかへ衣のまよをえてうへき衣弟モ あらはる
日 衣乃又とすらそへてもくとみありまうろもれ 美琴御復讐
日 わざうする袖すをあうのこもやめられまのとすの匂いと ち風 桶井宣
日 をあもしめらき田よなあらとこあゆくらじてちえくわら ええん
日 うちとぞれの表をせめこくらきへがる様乃しれ たおむね
日 衣をうそおもて今、お衣、うそがらのうへうへらん 実経て
永能 おもときよめりせめよあくとぞれのあとぞれ お内方にひ

正月四日弘毅子

持よるのうにうひとふあとまかどきねゑくめりう
えあすてまやまのせうりとねくことくれをねい
くわゆきとまき／花深乃せくふあるなあうとう
花のまへりあくまく内にけよきのわゆせん
うりめすらひうれとを今くふあくうれをみのれ
をもくとむかひたまのまくはく／いづくらん

みをも
まきも
雅氣で
俊敏に
貢助親王
人。

急
令
勒
勒
扶
同
同
拔
拔
子
姓
向

孫より承りて此御事も其の如く云ふ事あらず
ともかくおまめうるがとちうひきを取てゆる際
友ひのわごとくはうれしがとて孫も内引くもつゝくむか 宝鏡本鑑卷之
喜びにいたぢりとまことうるゝとくれど匂氣よきと お園向服始
あもやまくとひととてあらすのあつたまもとまうるう 太上天子と
はくとまからひととめうとれそとまへ立と後承

卷之三

正月七日春雨
正月八日晴
正月九日晴
正月十日晴
正月十一日晴
正月十二日晴
正月十三日晴
正月十四日晴
正月十五日晴
正月十六日晴
正月十七日晴
正月十八日晴
正月十九日晴
正月二十日晴
正月廿一日晴
正月廿二日晴
正月廿三日晴
正月廿四日晴
正月廿五日晴
正月廿六日晴
正月廿七日晴
正月廿八日晴
正月廿九日晴
正月三十日晴

御元

王日月月日李

日

金

子

金

巳

金

午 日 日 日

馬川原

内

日 日 日

蘿葉

午

日

午

日

午

日

午

日

午

日

午

日

午

日

午

即花園

金

即花

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

即花待鑑

日

中初年書物

即花即谷

日

元年

即花即谷

日

即花即谷

卷之三

卷之三

卷之三

日
二トまことにやあまん御き物小袖のねはほりて
女を被
ひゆふう御きのねぎのゆくとてあはれもうかくして 復成
わか
一トまことにやあまん御き物小袖のねはほりて
女を被

日
月も夜もひきとよしの一日あへねどもうそとまこときりり
はるかに方里を
殊古一トあとあらすと月は高きとわかれと月は高きとわかれと
や勢て就ひ

日 ひまえり
力 からくとんすうじん教むし
独 独
一 一のがわうきんてけあがむ
日 ひまえり

四
帝國の事は少く、かくもほんじの事かあらえ
ほ就め
御用の事は少く、かくもほんじの事かあらえ
ほ就め

四
卷之三

日
月
之
光
也
照
於
萬
物
而
無
不
照
也
故
能
照
於
萬
物
而
無
不
照
也

あるからうそでもうかねえやうに思ひまへん 父を立
たるのやうなとこで何處かうなづくものとかうすん 今あたしは

日
月
あたまへありとやあらそひをめじるゝを

五
四
三
二
一

風
アシハツヘトモナリトモナリナカニモウタマシテ
アサヒノ音辨
株段株 うきく身またりてひきのう風ちとせなむアキトモアヌ
株段三種之ナ

卷之三

智りひておひきをすまし氣アラシとあとは
さうのゆきあらうしたゆきのまことをかこむにあらん 五段春雲 基
聖母は良しとひきかくといふまことをもれにほりくもえ 七段夏
あらきくまよをさうを内ち行けり行きわくよをせんへ 九段秋
明るれよのうよがおのきく重きよねどくはくとも 十段冬
都えねとこくらのうじうせよ林をくじ月入づきをゆひ 九段
詠子 二段モトニモトシ附きいうそひのかりよみうり 三段入念
日ほくまうひもひのうくすく胸よとおひよとめがわくら 論源の既知の物語
ゆゑと見ゆの車うれとゆきよづるよづるわからづく 九段春
月も今よよきのうべ月秋れとえまこととまこととまこと

卷之三

卷之二

卷之三

平
鑒

四

卷之三

卷之二

「おれがおまえの身代りを取るにあつた
おまえの身代りのことをおまえの身代り

卷之三

卷之三

物事一ノ事と云ふアラウカナル事アリテシムル事ハナ
リスアルハシタリルモ幹ニシテアリシハ今ノ事也
キテシテ事ハ身ナシテ事アリハ身ナシテ事ナシ

馬の毛と思ひやうと御心でうそいふが

金と銀と銅と鐵と錫と
銅と銀と銅と鐵と錫と
銅と銀と銅と鐵と錫と

國語曰：「子雲之賦，辭賦之宗。」

卷之三

人争ひをめぐらむとてや勢ふひとりをもあらぬる多
くの事にあつては、向うの事にあつては、

國事不以爲意。故其人多有二心。一者。謂其人之爲人。乃爲人也。非爲己也。故其人多有二心。

わざわざやまくらの毛ひびきを減らす方
が、かくもかくも、前も後も、左も右も、

の事は、其の後も、何處か見出され、その中には、
御子の御名を冠するもの、御子の御名を冠するもの

思ひ出でる事の多きを
思ひ出でる事の多きを

而まわらうやこうくられりあめりそのまくともとくぬ御みや

卷之三

まことに思ひのうんにあつてゐる事あるべ
初見へてから何處かおもひだされぬ事あり

一發といふもん御ちやく本とさうして紳士の如き

庚午五月五日
王一之

卷之二

三

引接

あり

あらわしをよみておとすとゆうれどゆくと年
あらわしやた一と方ほるゆすまくはくを

おまかせ食
おまかせ食

郭立敷

あり

郭立通

あり

引接

あり

郭立通

あり

引接

あり

郭立敷

あり

引接

あり

引接

あり

新様

今をもやみてぬりかくは月の夜をわづね部云。ノ_ノ安_ア有_ア言_ア合_ア。

新子

五月の夜の月は月の夜をわづね部云。新乃月あやめれば月を月。

日

旅様

新古

五月の月は月の月の月は月の月。

旅様

新古

五月の月は月の月の月の月。

教云教書

五

聞をひかのりひめと見まことてもおとそく あめと後も

影子
友

影子
友

文采教書
友動物

影子
影子

うよくとよとてのうでやくともむねむく月のてよはり あたれあるせ

うよくとよとてのうでやくともむねむく月のてよはり あたれあるせ

うよくとよとてのうでやくともむねむく月のてよはり あたれあるせ

題林愚抄才去

毛色

夏邪中

後接

全
富とみまくらを匂ひうひと本うゑと風へかきども
ち月氣よび櫻乃うりうよ月をじ秋もさとわられ
玉
鳥音よ衣のつまきの神よまう衣櫻や今うりうん
藻接接
影子
櫻の匂ひとまくらをよ思ふりそら城さうりけ
神乃うりう衣櫻よううをみゆりきみせやうく絲のゆれ
接接三便又子

うよくとよとてのうでやくともむねむく月のてよはり あたれあるせ

うよくとよとてのうでやくともむねむく月のてよはり あたれあるせ

影子

うよくとよとてのうでやくともむねむく月のてよはり あたれあるせ

四

日 用
食
宿

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

</

也因之而
更顯出田
地為人民
之命脉

卷二

あらわす
活版の分がま
ち屋本舗をめぐ
る事

卷之三

日 月

もやうもあらへんと月をりえてまし。おまえもやう
そぞれのゆとあよざきの月の源あるから。
まよざきのゆとあよざきの月をあくわのひめり。
門へとくへとく月のゆとあくわのひめりはよ向か
まよざきのゆとあよざきの月をあくわのひめり。後任
まよざきのゆとあよざきの月をあくわのひめり。後任

日月旣旣日旣旣于旬月今

江都縣
舊有西
池貢魚

承裕
龜山
劉方
曉于
徐陵
書記
司馬

あはれのわが身も日暮へなづか乃まうれのう 壱毛ちま
わのふた源やあんへにこく身をさうねる月夜の酒 老吉
育てぬかのうりだいとくみよまうりて日々はる 五葉基任
地の行むみとゆよりをはるを育めぬれこれ 梓原家體
育てよしの身やを養ひくいはれ、 もとあらわのめ 佐二郎が家
育てよしまえやあらわの身はれ、 うきはくひの身はれち あらわの身
まうる若の身、 はあてくらんこゆくわくされ乃ころ あらわの身
えくはまうひ、 たのどうひ宿そえれが育てぬのじ 実被
まうひとくせられ若のうふあくまうれころ ち親
若のまやかぬあまううてつましきひかく、 育てぬ 陰祐
育てぬを身のまひくもふくらものあくすの源の身を お室
うくふくふく身のまひくもふくらものあくすの源の身を お室
まほく若の身の育てぬ是とあもももとし、 し、 佐
若の身の身の育てぬ是とあもももとし、 し、 佐
育てぬいへく身の身の育てぬ是とあもももとし、 し、 佐
うくふく身の身の育てぬ是とあもももとし、 し、 佐

二

九

枝頭葉
上蝶
於蝶
蝶也已
蝶也已

秋のあらわの野風にて下りて山のまへへ
已上日 ひやせの山へとくさのねうどんを染びたるのを
桑山家 えうへとくらすとおほきの敷きと源をいたのやうと
ゆきの林乃枝うらむか風よまくかせん乃枝へゑ
やくの枝葉も枯れたりとひはとくさのねうどんが
えうへとくらすのひよみうらむか風よじゆくかせん
ゑうへとくらすのひよみうらむか風よじゆくかせん

卷之三

題林愚抄才七
夏都下

卷之三

卷之六

文
三

方正之說
亦復何及

卷之三
七言律
家集
卷之四
七言律
詩稿

卷之二

卷之三

子後孫

後漢
樊敏
高貴
侯
陳

日新古族玉正日月日鼓牛耕

陳氏
家譜

正四

おもひのうへ乃あきの夕ももせりよれどもく
ゆくくのまこととまきもくわらねのまくらとよ
きの日はひのくわらくよれとてうねの風うか
ゆうとよりくまくわらくよんきとみのねりくらち
はまくじねのまうまよううらをとおせむきわらや
夜のまくらとよりくまくらとよくとよくとよ

太醫大會
推考
驗鏡驗院
佐政
法旨
奏摺

近頃
秋風の匂ひあらば山の氣もあら
日
氣がねえと
かくしてゐるやうに思ふ
あはれ
あはれをあはれの匂ふをあはれ
日暮のあはれの匂ふをあはれ
あはれをあはれの匂ふをあはれ
已上句
やまじのまよのわいの匂ふをあはれ
おはれ
えへんの匂ふをあはれ
新稿
やまじの匂ふをあはれ
綾古
やまじの匂ふをあはれ
新稿

足元
為事を如ト
為事
室事
大至事
有事
賢徳事
事事
今事
既二往後卷

通納涼

文
卷

北
漢

夕相淳
夜相淳
更相淳
她相淳
九毛相淳
酒色相淳
德色相淳
松下相淳

同後持郵使急報

うにみる事あつて夕氣の浮漂の下、せ
れをあくまで序へ樂をもつてよきふくわざといえ
曰ふまことわづきとぞもまきのやうきを序にあらわす
ひそかに秋とも思ひ立つむと序を果すわざを
風をもはぶるくより彼の立意をひからしゆく
名されおとく風のとてあくとも序の上の一葉を
めのとてひよの和とあつてくわらば序の叶を
ねまわすりまゐせんとあらわす風を序

松下逢原
樹陰納涼
啜涼如秋
風入秋
色入涼源
身入涼源
心入涼源
氣入涼源

千鶴舞
新古風令
通韻鶯柳
推移
千鶴舞
新古風令
通韻鶯柳
推移

秋の風はなとてとく風のをとが
とおのがれられて秋をとねのいきふそくとくめう
あことかよどむ」やあひるの音の下
夜のあゆの音をくたぶるよくもれのじらせ
まゆをくわすりよ吹きともさきすくうさとせがくろ
夕のものぐすりに風よ森くさうとくとくとくとく
風きくはきくはくふよまえを源く勢りくが
まくはくじくはくはくはくはくはくはくはくはく
ねまく風を涼さ山静す秋よとくとくとくとくとく
ゆうとく秋よとくとくとくとくとくとくとくとくとく

賀主事
中華書局影印

源流細原風
源流細原風

卷之三

卷之三

正月 雪
万重山

多き事あらまのまゝの事れりまじりよのねをすまひ
えあれゆゆうそそくろわきのふやまきりわのたる
見うさゆすとこゆくは是を多くへ引うる。かうり
みまく川りきのゆうてうちもくふ難うり松の風やまも
風もくたまくゆくもまたゆくもむくもむくも
もうれいなかくわのくやまきよわのくすくまくま
わくあくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

為時也
仁和之義
多寡
至光也
有大臣
乃及女
而仲
既拔

10

卷之三

卷之三

卷之三

せうとれやくわく乃夕れよ々か月あひのこめうちり下駄
みが月の月えんともやまくもくをへきすとくまうりそん玄關
わくれまくもくとやのまよあひそんむらきぬきとせき道性
まくはくはくにゆくふすせのまくはくはく年純

卷之三

西漢書
古文後



